

6. 入学・教育相談，入学選考に関すること

(1) 学校見学会と入学説明会を以下のように行った。

第1回学校見学会 6月12日

授業参観，施設見学，懇談会（参加者66名）

入学相談（教育相談） 9月4日～11月10日

相談件数 小学部16件，中学部15件，高等部8件

入学説明会 10月3日

2007年度児童生徒募集要項発表

兵庫県，神戸，明石，加古川，高砂教育委員会指導主事が参加

第2回学校見学会 10月12日

授業参観，施設見学，懇談会（参加者72名）

(2) 入学選考は12月7日に実施した。結果は以下のとおりであった。

入学志願者数 小学部11名（うち編入5名），中学部10名，高等部6名

合格者数 小学部5名（うち編入2名），中学部2名，高等部2名

（附属養護学校長 廣木克行）

5. 発達支援インスティテュート

5.1. 心理教育相談室

心理教育相談室は，自分自身のことや子どものこと或いは家族のことなどで心理的な援助を求めている人に対して，臨床心理学の立場から専門的援助を提供する地域に開かれた有料の相談室である。心理療法（カウンセリングやプレイ・セラピーなど）或いは必要に応じて心理テストを実施するなどの活動を行っている。相談スタッフは，臨床心理士資格を持つ博士前期課程臨床心理学コース（臨床心理士養成コース）担当の教員及び同コースの大学院生である。

相談は予約制で，相談活動の主な流れは以下のとおりである。

初めての相談申込みは電話での受付のみとし，申し込まれた相談ケースは週1回のスタッフ・カンファレンスで受理面接（インテーク）担当と陪席者を決める。インテーク担当は，必ず教員スタッフが当たり（陪席者は院生スタッフ），相談内容や相談者の状態，来談意志等について確認する。その後のスタッフ・カンファレンスにおいて，心理アセスメントなど継続ケースとして受理することが適切かどうかを検討し，受理された継続ケースは，教員スタッフのスーパーバイズの下で原則として陪席した院生スタッフが担当する。また，インテークの段階やその後のスタッフ・カンファレンスで他機関（病院など）への紹介が適切と思われる場合には，そのことをガイダンスする。継続ケースは，週1回（50分）の心理療法を原則とするが，来室頻度については相談者の事情などにより適宜話し合っている。なお，新規電話受付は，月・火・木・金（祝祭日を除く）の午後1時から午後6時に行っているが，お盆前後の2週間と年末及び年度末の1週間は休みとしている。

本年度（3月9日現在）の相談活動実績は，新規電話受付件数31件，インテーク回数21件である。また，年度開始と過年度からの引継ぎを合わせた総継続ケース数は，遊戯面接（プレイ・セラピー）16件，心理教育面接24件，臨床心理面接14件である。

（心理教育相談室長 播磨俊子）

5.2. ヒューマン・コミュニティ創成研究センター運営委員会

ヒューマン・コミュニティ創成研究センターの活動も2年目となり、センターの基盤はほぼできあがったと言ってよい状況になった。プロジェクト研究室も全面的に利用され、センター自体も「神戸大学を元気にする会」など、学部構成員の利用も定着してきた。

今年度には、センターの活動を示す Annual Report 2005 を発刊した。創刊号のため、ユネスコ UNEVOC 本部、ロンドン大学から祝辞をいただき、写真を含めた、多色刷り（全19頁）とした。Annual Report は HC センターの紹介を目的としており、表紙デザイン、内容ともに試作を重ねて念入りに作成した。しかしながら、電子媒体での発信には至らなかった。製作コストの点からも、電子媒体の利用は有益であり、次年度の課題としたい。

今年度にはセンター全体で取り組むというより、各部門での研究活動が中心となった。なかでも、「出版プロジェクト」では「人間像の発明」を発刊し、成果を上げることができた。次年度には同書籍を用いた授業（全学共通科目）も実施の予定である。以下、各部門の活動報告をする。

<ヘルスプロモーション部門>

ライフスキル教育プログラムの中学校3年生版を開発し、新潟県岩船郡の中学3年生を対象として実施した。平成19年3月には、教育校と比較校の3年生を対象とした調査を実施し、有効性を評価した。

小学校高学年用のライフスキル教育プログラム開発のための基礎資料を得るために、8都県12小学校の5、6年生約2,000人を対象として、ライフスキルと危険行動に関する調査を実施した。

中学生用の性に関わる危険行動防止プログラム開発のための基礎資料を得るために、埼玉県川口市の中学校の全生徒約500人を対象として、ライフスキルと性行動に関する調査を実施した。

兵庫県三田市の教育委員会と連携して、全市の小学校5年生と中学校1年生約2,000人を対象として、セルフエスティームと学ぶ意欲に関する調査を実施した。

ライフスキル教育及び健康教育の実践者を対象としたワークショップを、平成18年11月に神戸大学発達科学部を会場として開催した。

<障害共生支援部門>

今年度もインクルーシブな地域社会づくりを目指す実践的研究に取り組んだ。第一に「のびやかスペースあーち」における障害のある人たちの居場所づくりプログラムと連動させながらデータを収集した。第二に、インクルージョン概念を検討する研究会を4回シリーズで行った。第三に、イギリス、韓国に訪問し、インクルーシブな地域社会づくりのための国際的連携の足場をつくった。その際イギリスでは、平成18年9月にオープンユニバーシティで開催された Social History of Learning Disability Seminar において、Barriers to the accomplishment of a social model of learning difficulty in community practices と題した研究発表を行った。第四に、平成19年2月に「知的障害者の地域生活を支える中間施設の意義と方法に関する国際比較研究集会」を開催した。特に、この研究集会には国内のみならず、イギリスと韓国の実践家・研究者の参加を得て、今後の研究の方向性について大きな示唆を得た。第五に、各地の特色あるインクルーシブな地域社会づくりの実践を調査し、冊子『インクルーシブな地域社会をめざす拠点づくり』をまとめ発行した。

また、インクルーシブな表現による社会変革を目指す実践的な取組みとして、第一に、知的

障害のある人たちのエンパワーメントの一環として、新聞編集支援を継続した。第二に、人間表現学科及び「音遊びの会」との連携によって、平成19年3月に六甲ホールにて公開講座「音の町」を実施した。

< ボランティア社会・学習支援部門 >

今年度は、二つのパイロット事業を行うとともに、次年度の計画の準備のための会議を開いた。まず、山口県生涯学習センターとの共催で「中高生リーダーシップ育成セミナー（しょういん楽校）」事業の企画立案・運営・評価を行った。部門研究員及び子ども・家庭支援部門主任研究員らとともに、地域での日常的なボランティア活動に中高生を導く宿泊型プログラム・中間プログラム・まとめのプログラムの意味と課題を検証した。その成果は日本福祉教育・ボランティア学習学会で発表した。また、京都府社会福祉協議会との共催で「福祉でまちづくり事業キャラバン隊」事業（3年計画）を行った。京都府下の市町村社協の福祉教育担当者とともに、実際にそれぞれの事業に参加して、評価・検討を加えるというものである。次年度は、高校生と大学生のボランティア学習プログラムというモチーフでアクションリサーチを計画している。そのための会議を、12月から既に6回開催した。学部内の教員、阪神間のNPOリーダー、社協職員、他大学の研究者の協力を得ている。

< 子ども・家庭支援部門 >

今年度は、以下の4つの事業を行った。

ドロップイン事業「ふらっと」：子育て支援の1次予防を目指す基幹事業。場所は「六甲道児童館」及び「のびやかスペースあーち」。灘区保健福祉部、灘区公立保育所、神戸市地域子育て支援センター灘などの協力を得た。

ペアレンティング事業「0歳児のパパママセミナー」：ライフサイクルに合わせたニーズに対応する親教育プログラム。灘区保健福祉部、ろっこう医療生協の協力を得た。次年度は「1歳児のパパママセミナー」及び「ノーバディズパーフェクト（0歳～5歳児の親対象）」を行う予定。

次世代育成事業「小学生の赤ちゃんふれあい体験学習」：神戸市からの委託事業で、上記「0歳児のパパママセミナー」の赤ちゃんと灘区内の小学4年生・5年生が8ヶ月にわたってふれあう長期プログラム。灘区保健福祉部、灘区小学校長会の協力を得た。

アウトリーチ事業「産後母子家庭訪問」：ホームビジティングを出発点として、地域の子育て支援リソースに対象者（周産期の女性）をつなぎ「孤立・依存」から「自立」を目指す事業。灘区内の産科施設と連携。リソースとして「のびやかスペースあーち」も利用。

< 労働・成人教育部門 >

労働・成人教育部門では、月1回の定例研究会を開きながら、成人教育における学習理論の研究に関わる異業種の実践的な共同研究を実施した。とりわけライフストーリーの成人教育への応用を方法論とする実践・研究を進めた。平成19年2月から3月にかけて、「団塊世代の自分づくり」をテーマとするワークショップを開いた。

< ジェンダー研究・学習支援部門 >

およそ2年間をかけた「教師のためのセクハラ防止研修」のプログラムがほぼ完成し、大阪市の公立小学校にて試行した。教員研修としてはじめての試行であったため、部門研究員8名をファシリテーターとするなど、実際の研修より相当に贅沢な人員配置をし、参加型の研修とした。参加型の研修であること、教育的課題を含めたプログラムとしたことなどが

評価された。今後、さらに試行と修正を重ね、教員研修プログラムとして一般公開する予定である。

子育て中の母親を対象とした「遊ゆうプログラム」を「あーち」にて試行した。子どもだけではなく、母親も心を解きほぐすためのプログラムであり、実践の可能性を試すことを目的としたが、障害を持つ子どもや支援者とも関係づくりをするメドを立てることができた。

<プロジェクト研究、「市民の科学に対する大学の支援に関する実践的研究」>

本プロジェクトは、環境問題を含む科学技術的課題に対する市民のエンパワーメント・システムの構築とその実践的研究を目的とする。今年度は、前年度に創設した「サイエンスカフェ神戸」を平均月1~2回程度の頻度で継続開催した。これを通じて、市民や学生の企画・運営への参加、生命科学や哲学系の「カフェ」開催団体との連携、日本学会議による全国一斉開催キャンペーンへの協力、他大学を含む学部学生の研究フィールドとしての利用など、ユニークな展開が見られ、科学コミュニケーション分野で幅広い認知を受けている。また、神戸大学教育研究活性化支援経費の支援を受け、11月には本プロジェクトと密接な関係をもつ「市民と大学の環境フォーラム」が開催された。プロジェクトとしては次の段階として、大学の支援のもとでの市民自身による科学的調査・研究活動の展開を想定しているが、平成19年度よりこの機能を持つ「サイエンスショップ神戸」の創設に取り組む。

(ヒューマン・コミュニティ創成研究センター運営委員会委員 朴木佳緒留)

5.3. のびやかスペースあーち運営委員会

共生のコミュニティづくりを目的とした「あーち」は設置後2年を経て、利用者、実施プログラムともに増加した。詳細は以下に示すが、年間利用者数19,323名、一日当たり95.2名(平均)であり、乳幼児とその母親、障害をもった人々、多様なボランティア・スタッフでにぎわっている。平成18年度には407のプログラムが実施され(一日平均1.8)、大学の正規教育プログラムも37実施された。外部資金の獲得も順調であるが、業務をこなすスタッフを充実させる必要がある。防犯、防災訓練も実施された。以下、プログラムの概要と利用者数などを示す資料を添付する。

(以下では、継続的・定期的なプログラム、単発的、短期的なプログラムを示す)

子どもとその保護者一般を主な対象にしたプログラム

ふらっと：親子のくつろぎ空間として毎日開設

おひさま：保育士による親子遊びプログラム

紙芝居：退職教員による古典的な紙芝居

人形あそび：退職教員による腹話術を使った遊びのプログラム

人形劇：神戸・阪神間の人形劇グループや高校生による公演

めだか親子クラブ：退職教員が中心となった手作りおもちゃのプログラム

立体の紙工作：地域住民による紙工作の指導

折り紙遊び：折り紙講師による自由な折り紙広場

サイエンスプログラム：神戸大学の学生や教職員が中心になった科学プログラム

ほのぼの音ランド：音楽療法士による音楽療法プログラム

おはなしの国：ベテランボランティアによる読み聞かせ

スリング交流会：あーち利用者による自発的な子育て学習会

あーち de よさこい：踊り好きの青年たちがリードするダンスプログラム
らくがきおばさんがやってきた：近所の画家が展開する自由なアート空間
叶うアート：近所の画家たちが準備する表現の場
小学生と赤ちゃんのふれあい体験：赤ちゃんと小学生とがふれあう学習プログラム

障害のある子どもとその親を対象にしたプログラム

ほっと：就学前の発達障害児を対象とした学習プログラムの展開
ほっとらっく：発達障害児を持つ親の学習会と発達障害児の遊び場

おとなを主な対象としたプログラム

筆をもとう：近所の書家による書の初歩を気軽に学ぶプログラム
ほっと学習会：発達障害について学ぶ学習プログラム
思春期の子育てを考える会：中高生の親たちが子育てについて考える場
ライフストーリーセミナー：HCセンター労働・成人教育支援部門企画の中高年の人たちが自らを語るプログラム
遊ゆうタイム：HCセンタージェンダー研究・学習支援部門企画の子育て中のお母さんがリラックスできる場
0歳児のパパママセミナー：子育て中の若い保護者を対象とした学習プログラム
アートリーダー養成講座：地域のアートリーダーを養成する学習プログラム
Bla Bla Bla：妊産婦の交流会
食育ママセミナー：食育について学び考えるプログラム
布ぞうりづくり：ボランティアが始めた布を使ってぞうりを作るプログラム

その他

居場所づくり：障害のある人たちを中心としたみんなが集うプログラム
アートセラピー講座：子どもとおとなのアートセラピーを同じ空間で同時進行
音楽の広場：老若男女、年齢、国籍などに関わりなく一緒に楽しむ音楽プログラム
トライやるウィーク：中学生の体験学習の受入れ
修学旅行生受入れ：東京の中学生が地域福祉や防災について学ぶ場を提供
「あーち通信」編集委員会：利用者も交えて「あーち通信」をつくる場

博物館実習

「絶叫！悪知（あーち）わるわる団」「悪の美」「お話の生まれる場所」：博士前期課程の授業で取り組んだ作品を扱ったギャラリー
人生を語る表現：ハンセン病元患者のアート作品を扱ったギャラリー
サーカス in あーち：版画家脇谷紘、たんぼぼ作業所の作品を扱ったギャラリー
水族館：須磨水族園の協力による出前水族館

その他の展示

白血病で亡くなった女の子の絵画展
知的障害のある画家「田中瑞木」の個展

あーち利用者数とプログラム数等

「のびやかスペースあーち」の利用者数とプログラム数

2006年	開館 日数	利用者・スタッフの人数					日平均
		利用者数	学生スタッフ	住民スタッフ	実習生	総数	
4月	20	1162	87	92	5	1366	68.3
5月	19	1355	127	103	27	1631	85.8
6月	22	1790	84	115	30	2041	92.8
7月	25	2217	68	108	48	2466	98.6
8月	19	2223	41	75	0	2358	124.1
9月	24	2285	63	109	38	2519	105.0
10月	21	1732	49	103	28	1933	92.0
11月	20	1643	50	96	11	1820	91.0
12月	19	1339	64	129	0	1551	81.6
1月	19	1484	42	134	29	1708	89.9
2月	20	2093	50	136	57	2356	117.8
総計	228	19323	725	1200	273	21749	95.2

一般プログラム	大学の正規教育プログラム(実習)	プログラム総数	プログラム数/日
26	0	26	1.3
30	0	30	1.6
27	0	27	1.2
45	0	45	1.8
29	0	29	1.5
47	8	55	2.3
28	6	34	1.6
38	2	40	2.0
33	0	33	1.7
31	7	38	2.0
42	8	50	2.5
376	31	407	1.8

「あーち」の事業費に関わって獲得した外部資金

2006年度	文部科学省委託費「地域子ども教室」推進事業	1,824,000
	文化庁助成「文化芸術による創造のまち」支援事業	2,020,000
	神戸市委託研究費	300,000

「あーち」と実質的に連携協力関係にある諸団体

団 体 名	連携協力の内容
神戸市市民参画推進局 神戸市環境局 神戸市教育委員会 神戸市灘区 神戸市地域子育てセンター、灘区保育所(7カ所) 神戸市立須磨水族園 神戸市立長峰中学校 佐川急便株式会社 (株)キャリアリンク 灘区社会福祉協議会 社会福祉法人たんぼぼ	運営協力 サイエンスプログラム 地域子ども教室(なだっ子広場) 「文化芸術による創造のまち」支援事業 ふれあい体験 / パパママセミナー ふらっと 博物館実習 トライやるウィーク サイエンスプログラム サイエンスプログラム ボランティアコーディネート 博物館実習 「文化芸術による創造のまち」支援事業 障害児者居場所づくり事業
NPO 法人マザースサポーター協会	運営協力 ふらっと
NPO 法人神戸子どもと教育ネットワーク	運営協力 メダカ親子クラブ
NPO 法人コミュニティ・サポートセンター神戸	運営協力 NPO 関連イベント
NPO 法人神戸まちづくり研究所	運営に関する相談 修学旅行生仲介
チャレンジひがしなだ	運営協力 筆をもとう
ぷちぱんそー	叶うアート 博物館実習
神戸海星女子大学	ふらっと 運営協力

他に個人による協力も多数あり。

(のびやかスペースあーち運営委員会委員 朴木佳緒留)

5.4. 社会貢献室

社会貢献室としては、昨年に続き、学部構成員のおよそ4分の1にあたる25名の教員に社会貢献レポートの執筆を依頼し、原稿校正後ウェブにて3月中旬に公開した。ウェブ公開したものは刊行した。

当初の目的の一つであった社会貢献レポートの出版に関しては予定どおりである。

もう一つの目的であった社会貢献室主催の公開講座開催に関しては、本年度は他の公開講座開催のため、来年度以降に計画することとした。

総合的には、目的は概ね達成されている。

(社会貢献室長 高橋 正)